

指定校番号	28057	学級活動	児童会・生徒会活動	学校行事	○	別紙様式
-------	-------	------	-----------	------	---	------

平成 28 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校「特別活動の取組事例」

学校名	北広島町立八重小学校	校長	神川 義紀	生徒指導主事	吉川 孝志
-----	------------	----	-------	--------	-------

取組事例名 『校内駅伝大会』

取組のねらい 『異学年交流』

数年前まで、本校では体育の時間に行う持久走の練習成果を「マラソン大会」とし学校行事で行ってきた。ただ、マラソン大会は個人としての頑張りが評価される場面がほとんどで「みんなで喜ぶ」という場面が非常に少なかった。加えて、学年という垣根を飛びこえての交流、当日だけでなくその日に向けてのつながり、行事後にも生かせる望ましい人間関係づくりなどを考えいく中で、マラソン大会から駅伝大会へと変更することとした。「箱根駅伝」や「ひろしま男子駅伝」の影響もあってか、児童もたすきをつないでいく駅伝に非常に興味をもっており、マラソン大会から駅伝大会への移行はスムーズに行われ、これ以後 2 学期後半、全児童による校内駅伝大会を行うようにした。学校行事ではあるが、児童会（6 年生）を中心に事前・事後の取組を行っている。下学年にとっては「ぼくたち、わたしたちも大きくなったら、あんな風に走りたい（がんばりたい）」というあこがれの対象を具体化させ、なりたい自分をイメージさせるのに役立ち、上学年にとっては、「自分たちがチームみんなをまとめて引っ張っていくのだ。」という責任を自覚させ、取り組ませることで自己有用感や自己肯定感の向上につなげていく。

取組の具体的内容 『学年をこえた絆づくり』

チームはふだんの掃除などで使っている「やえっこ班」を活用。全部で 12 チーム、1 チーム 12 名から 13 名で、各学年 2 名（人数の多い 5 年だけが 3 名）といった人数編制だった。縦割り活動班の「やえっこ班」を活用し、12 チームを作る。全 14 区間を、高学年区間 0.9 k m、中学年区間 0.7 k m、低学年区間 0.6 k m に分ける。校庭のトラックを使い、そこから校外に飛び出していく形でコースが設定してあり、区間によって折り返し地点などが遠くなったりしている。校庭のトラックでは、各チームの児童が自分のチームの応援をしており、学校の外では、保護者や地域の人たちがランナーに声援を送っている。各折り返し地点やコースの要所には職員を配置し選手の誘導や安全の確保、声かけなどを行う。「やえっこ班」は毎日の掃除にも活用しており、異学年であっても、顔と名前が一致する利点がある。チームを 12 に分けることで、ほとんどのチームに 6 年生（23 名）が 2 名入ることになり、6 年生全員がキャプテン、又は副キャプテンの責任を負うことになる。欠員が出た場合は、原則同じ区間を走る学年の児童が 2 回走るようになっている。

- 1 区（中学年）⇒ 2 区（高学年）⇒ 3 区（低学年）⇒ 4 区（中学年）⇒ 5 区（高学年）⇒
- 6 区（低学年）⇒ 7 区（中学年）⇒ 8 区（高学年）⇒ 9 区（低学年）⇒ 10 区（中学年）⇒
- 11 区（高学年）⇒ 12 区（低学年）⇒ 13 区（中学年）⇒ 14 区（高学年）

取組の課題・創意工夫 『チームとしての結束力を高める』

駅伝大会の本番まで 20 日くらい前に、チーム結団式を行う。これは、お互いの思いを伝え合い、確かめ合いながら、成功イメージを共有し、気持ちを一つにする活動である。この式に先立ち、6 年生は班の目標を決め、それにふさわしいイラストやデザインなど画用紙に描く。結団式では、6 年生が用意した画用紙にチーム全員がプラスの姿を書き込んでいき、書いたら自分のサインを入れる。こうすることで、自分はもちろん、全員が安心感をもって走れるようにする。最後に一人ずつ自分が書いたプラスの言葉を紹介する。こうして各チームでの話し合いが終わると、今度はチーム毎に全児童の前へ出て、チームの目標、この目標を設定した理由、チームのかけ声を紹介していく。この日以降、チームごとの練習がスタートする。



取組の成果（効果） 『なりたい自分（モデル）の発見と自己肯定感の向上』

駅伝当日、欠席者0名、足の怪我などによる見学者2名。運動が苦手な児童も多数完走。校庭では6年生を中心に懸命に走るチームメイトに大きな声で声援を送る。コースに立っている教職員はもちろん、沿道の保護者や地域の方々からも大きな声援をもらい、子供たちの頑張りは最高潮に。駅伝は、先頭以外はマラソンのように一斉スタートではなく、周回コースなので、個人順位も正確には分からず、自分のペースで走れるという利点もある。走りが得意な子はもちろん、走りが苦手な子も大きな拍手とともにチームメイトに迎えられ、みんないい笑顔に。その中でも高学年、特に6年生の頑張りは素晴らしい。病気やケガで走れなかったチームメイトのために、あるいは欠員補充のために、たとえ走るのが苦手であっても2区間走る姿は、下学年の児童の目に焼きつき「自分たちも大きくなったら、あんな風に走るんだ！」という絶好のモデルケースになる。また、6年生を中心とした高学年は自分たちの頑張りに対し、下学年や教職員、地域の方からももらった声援が自己有用感や自己肯定感を高め、新たな活動への自信と意欲づけになる。走り終わった後は、結団式で書いた紙を手に、チーム毎に記念撮影をし、駅伝大会を通しての反省会を行った。



※学期ごとに全校で実施している「今の気持ちアンケート」での肯定的割合

	1 学期		2 学期
6 年生「自分のことが好き」	87%	⇒	96%
「自分のいい所は、みんなにわかってもらっている」	91%	⇒	91%
「学校生活が楽しい」	87%	⇒	96%

今後の展開 『継承』

駅伝大会後に撮影した写真は、6年生が卒業するとき、各班のメンバーが6年生に寄せ書きをする色紙の中心に貼る。この日以後、日々の掃除などでの縦割り班活動にいつそうまとまりが見られるようになる。今後は、6年生というモデルを胸に、各学年がよりよい自分、集団をめざして活動をしていく。特に、3学期の「6年生を送る会」に向けて、感謝の気持ちを込めた出し物を考え、本番では各学年が今後の学校生活における決意表明をしていく。

転校生で初めて駅伝を経験した児童は持久走が苦手だったが、「来年はもっと早く走れるようになりたい。みんなの声援がうれしかった。」と感想を書いた。また、ある4年生は「自分が1区で出遅れたけれど、チームのみんながあきらめずに走ってくれたのがうれしかった。今年最高の思い出になった。」と感想を書いていた。

他校へのアドバイス 『異学年交流のパワー』

異学年交流が学校の核になっていくと、素晴らしい伝統が築き上げられていく。先輩の頑張りを見て、後輩がその姿を見て頑張る。さらにその後輩が先輩の姿を見て頑張ることを繰り返していくうちに、先輩の壁も少しずつ高くなり、さらによいものをめざして取り組んでいくようになる。このプラスの連鎖が異学年交流のパワーの源であり、物事を前向きにとらえ、一生懸命に取り組む児童の育成に役立つものだと信じている。